

## 子規連句私解

### 獨吟百韻「灯ともさぬ」の巻

其十五 〈三ウ八句〜九句〉

大 島 富 朗

青き日の松のあはひに昇りけり

御座所の屋根許り見ゆ

雑の十一句目、叙景句が続く。

打越の「蟹」、前句の「松」、付句の「御座所」、如何にしてもこの三句の渡り、須磨源氏の趣向から離れ難い。

三十六句の歌仙形式に比べると約三倍弱の長巻百韻、「一步もあとに歸る心なし。行にしたがひ、心の改はたゞ先へ行心なれば也」というものの、歌仙が高低差ある短い急流なれば百韻はゆつたりと流れる大河に準えられよう。一方が変化の妙を味わうものなら他方は絵巻風な悠揚たる風韻を楽しむものであり、緩急が織りなす情趣の味ともいえる。

打越・前句・付句が綾なす、流るるともなく流れゆく大河の、深緑色した、いわば淵のような須磨の面影は往昔の行平・源氏君を偲ばせ、更に一谷の仮御所や屋島のそれへと繋り、それらが響き合いながら醸し出すところの捨て難い悲哀の情を今に伝える。

歴史は、数多の流され王を生み、彼らの悲劇を物語る。

淡路の淳仁<sup>注2</sup>、讃岐の崇徳<sup>注3</sup>、隠岐へは後鳥羽<sup>注4</sup>・後醍醐<sup>注5</sup>、土御門は土佐<sup>注6</sup>、佐渡の順徳<sup>注7</sup>など、又、流され王ではないが伊豆へ流され彼の地で没した伴善男<sup>注8</sup>、筑紫太宰府にて御霊となった道真<sup>注9</sup>、日蓮<sup>注10</sup>・世阿弥<sup>注11</sup>の佐渡という具合に、等しく政治

的負者あるいは勘気を受けし身にして、天離る鄙の配所で流謫の身を侘び託ち眺めた日月、送る月日。

「須磨の浦に藻塩たれつゝ侘ふとこたへよ」と詠じた行平のことは夙に知られることながら、加えて崇徳院が、

浜千鳥跡八都へ通へ共身ハ松山ニネヲノミゾ鳴

の一首に込めた望郷の情、あるいは、

我こそは新島守よ隠岐の海あらし浪風心して吹け

同じ世に又住の江の月や見む今日こそよその隠岐の島守

で知られる「遠島百首」に切々たる孤独を詠出した後鳥羽院、鳴神と化した道真にすら、

海ならずたゞへる水の底までにきよき心は月ぞてらさん

ながれゆくわれはみくづとなりはてぬ、君しがらみとなりてとゞめよ

という心の奥奥の気弱さを詠うを思うにつけ、彼ら流謫者の胸中を付度する時、その鬱々然とした日々は想像するに易い。

前句の「青き日」は斯くの如き心象を余すことなく具体化して文芸的真実を炙り出す措辞であったが、付句はそれを反転させ、「御座所の屋根」瓦、その瑠璃

や碧の色瓦が「昇」る朝日に輝く遠見の景。

莊嚴たる都の「御座所」に比ぶべくもないが、流され王のそれは鄙の地にあって、「蟹」人らが陰で松の御所と噂するほどに美しく映る。

「御座所」は「オマシドコロ」と訓む。家柄身分などが格別の人がいらつしやる所の意味である。

因みに、『源氏物語』明石巻から、「住吉の神の導き」に従い源氏は須磨の地を去り明石の浦へ移徙、その「前の守新発意」即ち明石入道の館に迎えられるが、彼の館の佇まいを引く。

浜のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひにそむきける。入道の領じめたる所、海のつらにも山隠れにも、時につけてけふをさかすべき渚の古屋、行ひをして後世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三昧を行ひ、此世のまうけに秋の田の実を刈りをさめ、残りの齢積むべき稲の倉町どもなど、おり／＼所につけたる、見所ありてし集めたり。高潮におちて、この比、むすめなどは岡辺の宿に移して住ませければ、この浜の館に心やすくおはします。

舟より御車にたてまつり移るほど、日やう／＼さし上がりて（略）所のさまをはさらにも言はず、つくりなしたる心ばへ、木立、立石、前裁などのありさま、えもいはれぬ入江の水など、絵にかゝば、心のいたり少なからん絵師は、かきをよぶまじと見ゆ。月ごろの御住まるよりは、こよなく明らかになつかしき。御しつらひなどえならずして、住まるけるさまなど、げに都のやむことなき所／＼に異ならず、艶にまばゆきさまは、まさりさまにぞ見ゆる

例えば、右引用中の章句「日やう／＼さし上がりて」などは「松」こそなければ前句の風情に通底しよう。

「蟹」人の眼に映る館の景観、実に未だ見ることあたわざれどこれぞ噂に聞く

「都のやむことなき所／＼」の「艶にまばゆき」「御座所」と、改めて朝日に眩しき「青き」「屋根」瓦を眺望する。

日關るにつれ「御座所」の瑠璃瓦は深みを増し、「松」はその影を濃くしてゆく。

注1 服部土芳『三冊子』内「しろさうし」（頼原退蔵校訂『去来抄・三冊子・旅寝論』岩波文庫本、94頁）

2 第四十七代天皇、733（758）764在位、「惠美大臣ト同心被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>孝謙之間、廢<sub>二</sub>淡路國<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>彼國三年之後崩御<sub>一</sub>」（岩波古典文學大系86『愚管抄』、72頁）

3 第七十五代天皇、1119（1123）1141在位。保元の乱の敗北により讃岐国に流された。慈円の『愚管抄』は「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ亂逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ」と指摘する（大系86、206頁）。

「生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給」うた後朝廷に対して怨念を持ちながら彼の地で新院崩御、安元三年1177七月二十九日崇徳院と追号されるが、其後も怨霊の発動ありしこと『愚管抄』にあり。尚、孝明天皇の意を体した明治天皇が明治元年1868八月に崇徳院の御霊を讃岐白峯陵から京に奉じ上京区飛鳥井の地に白峯宮を造宮、平治の流れされ王は七一年の時を経てその望郷の素懷を全きものとした。同六年に淡路廢帝淳仁を合祀。

崇徳院のことは『保元物語』に詳しい。他に、延慶本『平家物語』第一末卅六「讃岐院之御事」、同長門本卷第四「讃岐院御事」、『源平闘諍録』一之下九「讃岐院追号の事」、『源平盛衰記』第八卷「讃岐院事」、『撰集抄』卷一第七「讃岐白峰之事」、謡曲「松山天狗」等々が崇徳院説話を語るが、孰れも『保元』崇徳像の域を出ぬなかで、上田秋成『雨月物語』巻一「白峰」は「望郷の鬼」崇徳を「海洋の鬼」とすることで大魔王と化してなす平治の乱以来平家滅亡に至るまでの凄まじき歴史的現実としての「ムサノ世」を将来した首魁、怨霊崇徳の造型に成功し、歴史叙述としての「怨霊の発動」に血肉を通わせ真実味を付与した点は特筆されてよい。

補注1 壽永三年四月十六日。崇徳院并二字治贈太政大臣實殿ツクリテ社壇春

日河原保元戰場ニシメラレテ（略）コノ事ハコノ木曾ガ法住寺イクサノ事。偏ニ天狗ノ所爲ナリト人思ヘリ。イカニモコノ新院ノ怨霊ソナド云

事ニテ。タチマチニコノ事出キタリ（大系86、263頁）。

2 慶應四年八月廿四日、太政官六十六布告、「今般讀岐國より崇徳天皇神靈、御還遷仰出され、來月上旬、当地今出川通飛鳥井町へ着御に候事云々」

3 岩波新古典文学大系43『保元物語 平治物語 承久記』（92・7・30）付録「保元物語 參考資料」は崇徳院を知る上で貴重にして利便性大である。

4 吉澤義則校註『源平盛衰記』平家物語（白帝社刊、昭36・7・25）、162頁

5 『平家物語』長門本二、（古典資料研究会、昭46・8・15）、278頁

6 福田豊彦・服部幸造全注釈『源平闘争録下』（講談社学術文庫1397・99・9・10）、463頁

尚、該書の「解説」―諸本比較「崇徳院」は簡にして要を得て有益である。

7 『源平盛衰記上』（有朋堂文庫、昭2・4・13）、252頁

8 西尾光一校注『撰集抄』（岩波文庫、昭45・1・16）、46頁

4 第八十二代天皇、承久の乱に敗れた結果北条義時により隠岐に流され、彼の地で没した。以下、『愚管抄』巻第二の記事から引く。

承久三年（略）五月十五日二亂起リテ六月二武士打入テ、（略）今年天下有内亂。コレニテ、俄二主上執政臣改易、世人迷惑云々。

一院遠流セラレ給、隱岐國。七月八日於飛鳥殿御出家、十三日御下向云々。但ウルハシキヤウハナクテ令首途給云々（略）土御門院并新院・六條宮・冷泉宮、皆被レ行流刑ニ給云々。新院同月廿一日佐渡國、冷泉宮同廿五日備前國、小島、六條宮同廿四日但馬國、土御門院ハ其比スギテ、同年閏十月土佐國へ又被レ流刑ニ給。其後同四年四月改元。五月比阿波國へウツラセ給フ由聞ユ。三院、兩宮皆遠國ニ流サレ給ヘドモ、ウルハシキ儀ハナシトゾ世ニ沙汰シケル也。

（大系86、125頁）

5 第九十六代天皇、朝權回復を計り討幕を画す（元弘の変）も敗れ隠岐へ流されるが、元弘三年閏二月同島脱出、建武新政を行うが尊氏の離反により吉野へ逃れ南朝を樹立、延元四年八月十六日同地にて崩御。尚、後醍醐帝の討幕に参画した日野資朝は正中二年に佐渡へ配流（正中の変）、元弘の変の折、配所にて殺害された。

6 第八十三代天皇、承久の乱にて父後鳥羽・弟順徳兩院は流刑に処せられたが院一人のみ特別罪を問われざるを潔しとせず自らを土佐へ下し、後に阿波へ移り同地にて崩御。

注4『愚管抄』の記事参照。

『土御門院御集』（合点詞家隆卿）から引く。

寄風述懐

ふく風のめにみぬかたをみやことてしのぶもくるし夕暮の空  
先うちみ候より已落涙かきくらし候畢、善惡すべて  
不覚候へども、心詞無申限候歟

寄月述懐

雲のよりやどりなれに袖の月いかにかはれる涙とかみる  
是又凡夫更更浅心難及候歟

桜

いそがね花のころこそあはれなげきのもとに春はへぬれど  
うちききたるより又なみだにかきくらし候ひて、  
物不覚候

帰雁

かへるかり雲はたれもなれしかどうらやましきは春の通ぢ  
又心肝を動無申限候歟、又落涙候

（新編国歌大観）第七卷（平元・4・10）収、262頁

7 第八十四代天皇、父後鳥羽院と志を同じくした結果承久の乱に敗れ佐渡へ流され、二十年後の仁治三年九月十二日配所にて崩じた。

注4『愚管抄』の記事参照。

『順徳院御百首』（詞定家卿）から引く。

ときしもあれ秋なき色も年浪の半越行くすゑの松山  
末のまつ山年浪半こえゆく心、またふるきものの具  
あたらしき財となり候

人ならぬ岩木もさらになしきはみつのこじまの秋の夕暮

此三十一字毎難抑感涙候、玄之玄最上候歟

ながめやるさとだに人の跡たえし野中の松に雪はふりつつ

野中の松の雪おも影あはれもふかく候

たづねてもみぬめの浦にやく塩のけふりはそれと人またのまじ

みぬめの浦のけふり、又同前毎度事還而無念候歟

暮をだに猶きえわびし有明のふるき別になりにけるかな

（新編国歌大観）第十卷（平4・4・10）収、149頁

8 平安前期の公卿、貞観六年<sup>864</sup>正月十六日大納言に任ぜらる。同八年閏三月十日の夜、応天門焼失の犯人として大逆罪に問われ、同年九月伊豆へ配流、同十年同地にて没。事件の顛末は『伴大納言絵巻』（国宝）に描かれる。

9 昌泰四年901正月二十五日、右大臣の任を解かれ突如大宰権帥として左遷さる。

解任左遷の理由は権力専横なるものの真相不明、流謫の地太宰府にて延喜二年

二月没。彼の怨霊としての発動は『日本古典文学大辞典』第二巻(岩波書店刊、  
84・1・20)、菅原道真の項(項目執筆秋山虔)中の「付記」が参考になる(該書、  
539・541頁)。

10 相模国江ノ島腰越村電口での斬首の難を免れた(文永八年11月12日)が、後に  
佐渡へ流謫さる。文永十一年に赦免され鎌倉に戻るも同年五月離鎌、漂泊の旅  
に出る。

11 將軍義教の勘気を受け、永享六年1324五月佐渡に配流、時に世阿弥七十歳余と伝  
う。『金島書』の奥書に次なる一首を残す。

これをみんなのこすこがねのしまちどり跡もくちせぬ世々のしるしに

補注1 享年八十一歳とする伝承残るが厳密に言えば生没年共に不明が正しい。

2 佐渡配流中に作文した、若州・海路・はい處・時鳥・泉・十社・北山・  
と題された七曲と無題ながら奈良興福寺二月、薪の神事を称えた一曲、  
都合八篇の謡からなる。

中でも、「はい處」の、  
(略)しばし身を、をきつき處、こゝながら、く、月はみや  
この雲あぞと、おもひなくさむ斗こそ、老のねざめのたよりな  
れ。げにや、つみなく、はいしよの月をみる事は、古人のの  
ぞみなるものを、身にも心のあるやらん、く。

(能勢朝次『世阿弥十六部集評釋』下)(岩波書店刊、昭19・  
8・25、697・698頁)

と作文する世阿弥の胸中を思いやる時、いうべき言葉を失う。

12 引用は内閣文庫蔵半井本保元物語(岩波新古典文学大系43、132頁)による。

尚、一首の二句目を金刀比羅宮本(岩波古典文学大系31)、『源平盛衰記』(有朋堂  
文庫)は共に「都へ」とする。『源平闘諍録』(講談社学術文庫)は半井本に同。  
『沙石集』も「都に」。

一首の「保元」本文中の位置の異同は新大系43、132頁注一〇参照

13 試しに、半井本・金刀比羅宮本は「望郷ノ鬼」、大系31付録の書院部蔵古活字本  
は「亡郷ノ鬼」と表記する。蛇足ながら付言すれば、共に「望郷ノ鬼」と記述  
するが、崇徳院を茶毗に付したその煙が都の方へ流れ行くのを半井本は「煙ハ  
都ノ方ヘソ靡キヌラムトゾ哀レ也」と物語る。一方、金刀比羅宮本は「さしも  
御意趣深かりし故にや、焼上奉烟の末も都をさして靡けるこそ怖しけれ」と語  
り、院の「望郷」の情の有意と変質を暗示する。そうした語り口に「望郷ノ鬼」

を「海畔ノ鬼」へと変換させた『雨月』『白峰』の、発想があったと考える。

補注1 武久堅監修責任『保元物語六本対観表』(和泉書院刊、804・10・10)

395頁

2 『対観表』は「望」とする、不審。

14 岩波新古典文学大系46『中世和歌集 鎌倉篇』(91・9・30)収、195・216頁。

院同様、配所における真情を詠むものに『順徳院百首』『土御門院御集』、京極  
為兼の佐渡流謫での詠『為兼卿鹿百首』『為兼卿遠所詠歌』(三十三首)『續群書  
類從 第十六輯上』収「為兼集」参照などがある。

15 道真の詠百中、最も人に知られる詠は「流され侍ける時、家の梅の花を見侍て」  
との詞書を持つ『拾遺和歌集』巻第十六 雑春に収められた、  
東風吹かばにはひをこせよ梅の花主なしとて春を忘るな  
であらう。

引用詠の「海ならず」は『新古今和歌集』巻第十八 雑歌下に収める歌群十  
二首中の一首、「海」の歌題にての詠。「ながれゆく」は『大鏡』第二巻へ左大  
臣時平の条(岩波古典文学大系21、72頁)による。「海ならず」の詠も同条中に  
収む。尚、二句目「たゝへる水の」の解釈に関しては該書第二巻 補注十二参  
照(447頁)

又、『菅家後集』の「敍意一百韻 五言、〈敍意千言裏 何人一可憐〉と結ぶ百  
韻二百句に及ぶその情掬すべきものがある(岩波古典文学大系72『菅家文章 菅家  
後集』487・499頁)。

16 岩波新古典文学大系20『源氏物語 二』、60・61頁

御座所の屋根許り見ゆ

鄰々たる馬車あとさきを争ひて

付句、「野分」こそ吹かねど何処か蕪村の、

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉

を髣髴とさせ、緊迫感が句中に漲る。

偏に「あとさきを争ひ」という措辞が生むものである。

仮りに蕪村句に依拠したと考える時、前句の「御座所の屋根」は鳥羽離宮の屋

根、白河・鳥羽・後白河の三代の法皇がその政院の舞台とした離宮である。

鳥羽は地勢的にみて鴨川・桂川の合流点に近く池沼も多く、洛中朱雀大路四塚から鳥羽の作り道が延びて来ており、往還の便もよく、都造宮当時から貴顕紳士らが拡大な別墅を設けるなどし、その景観殊に優れた地であったという。<sup>注2</sup>

その鳥羽の離宮へ向い速駈ける鎧武者五六騎、あるは先、あるは後となり野分の中、さながら黒き旋毛風のごと速駈けてゆく一団。

時恰も保元元年<sup>1156</sup>七月二日申刻、予てから不豫なりし法皇鳥羽殿にて崩御、『保元物語』はその刻を次のように語る。<sup>注3</sup>

依<sup>レ</sup>之、禁中モサハガシク、院中モサ、ヤク事ノミゾアリケル。「一院力クレサセ給ナバ、主上ト新院トノ御中心ヨクモマシマサズ。世ハタハアラジ」ト、人サマノ二申ケル（略）

季は初秋二日午後三時過ぎ、崩御による洛中の徒ならぬ緊張の有様が「サハガシク」「サ、ヤク事ノミゾ」と、その具体的内容に立ち入らぬ語り口から伝わってこよう。

鳥羽院の死は更なる一触即発的政治危機を招来悪化させ、慈円がいう「ムサノ世」の引鉄、保元乱の濫觴となった。<sup>注4</sup>

先の引用に続いて『保元』が語る「新院方ノ武士」の動向に注目してみる。

三日ノマダトウ、新院方ノ武士、東三条ニ籠居テ、夜ハ集リツ、謀反ノ事ヲハカリケリ。昼ハ木ノ上、山ノ上ニシテ、当時ノ内裏高松殿トテ、姉小路西洞院ニテアルヲ、伺見由ヲ、主上聞食テ、下野守義朝ヲ召仰ラレテ、東三条ノ留守ニ候ケル少監物藤原光真并兵士両三人召取テ、事子細ヲ被<sup>レ</sup>召問。一院御不豫ノ間ヨリ、謀反ノキコエアリ。此程、又、軍兵多ク東西ヨリ都ニ入集ナリ。並ニ兵具ヲ馬ニ負セ、車ニ積、入ツドヒ、東三条ニモ、武士、夜ルハ集リ、昼ハカクル、トゾキコエヌル

折から新院、鳥羽田中御所に行幸中。<sup>注6</sup>鳥羽殿へ急ぐ武者、「禁中サハガシ」き

ことどもの注進なるや、異変に備えてか、新院の御方の武者共が鳥羽へ急ぐ。洛中も又然り、謀反の真偽如何、騒然たる刻が過ぎゆく。

孰れにしろ『保元』が語る「兵具ヲ馬ニ負セ、車ニ積、入ツドヒ」「夜ルハ集リ」たるさま、さながら付句を見るようである。

合戦必定と覚えた洛中「貴賤上下」の群集は、

人様ノ也。何ト聞分タル事ハナケレ共、洛中ハ静ナラズ。家々ニハ、門戸ヲ不<sup>レ</sup>開シテ、所々ニハ、馬車ノサワガシク、高モ賤モ、資財雑具ヲ東西南北ヘハコビカクス。<sup>注7</sup>

有様（尚、この件の「馬車」はヘバシヤンならずヘウマ・クルマンと訓むか）。<sup>注8</sup>

「謀反ノ輩、京中ニ入集リ、武士共、道ニサリアヘズ狼籍也」一方で、当の新院は依然として鳥羽田中殿に留まりたるまま動かず。剩え、父鳥羽院の初七日の御仏事同所にて執行されるも新院「出サセ給ハザリケレバ、人弥怪ヲナス」中、京還御の決意を固め密かに行動を起す。<sup>注9</sup>

『兵範記』は事の次第を次のように記す。

九日戊申、夜半、上皇自鳥羽田中御所、密々御幸白川前齋院御所、<sup>鳥羽院去二日渡上下成奇、親疎不知云々、</sup>

清盛・義朝を大将とする主上側の武者共は十一日の明け方、新院らが籠居る白川殿を襲い二刻がほどで雌雄が決した。

（略）鶏鳴清盛朝臣、義朝、義康等、軍兵都六百餘騎發向白河、<sup>清盛三百餘騎自一原方、義朝二百餘騎自大炊御門方、義康吉備前守方、</sup>

臣下祈念、辰刻、東方起煙炎、御方軍已責寄懸火了云々、清盛等乗勝逐逃、上皇左府晦跡逐電、白川御所等焼失畢、<sup>實院御所并院北殿也</sup>

『兵範記』が伝える合戦の次第、<sup>注10</sup>主上側の一方的勝利。『保元物語』は「惣シテ御方ニハ、人数エラル、兵共一千五百余騎ノ候ケル。我、前ト靜ヒテ、馳向ヒケリ」

(傍点引用者)と語る、迅速果敢な先制攻撃であった。加えて「上皇左府晦跡逐電」の一節、生々しくて非情である。

「糶」、正しくは「糶」<sup>注11</sup>。新聞活字不鮮明なため「𪛗」を「𪛗」に誤れるか(以下「糶」の表記に従う)。「糶々」は(一)水の清くすきとほつて石の見えるさま(二)月の光の冴えたさまの謂なるが、付句の場合は後者(二)の意味でよい。

打越に付けた時前句の「御座所の屋根」は「昇」る朝日を受けて瑠璃色に輝くその遠見の景であったが、付句はそれを月光に冴え冴え渡る屋根と見替え、蕪村の「鳥羽殿へ」一句を敷衍し、事変注進のため連銭蘆毛の馬(「糶」)に引かせた「馬車」を疾駆して、目指す「御座所」、即ち鳥羽田中殿・白川御所・内裏高松殿の何れでもよく、へと武者が急ぐ絵柄である。

些か蕪村句に拘りすぎた。

改めて付句の「馬車」から付筋の解を試みる。

石井研堂『明治事物起原』第九編 交通部馬車の始め は次の文をもって起筆する。<sup>注12</sup>

明治の乗物として、旧来の駕籠に代はりしものは、まづ洋人側より行はれ始めし馬車を先頭とし、それを折衷せる人力車出て、自転車、汽車来舶す。いま馬車の全貌を究むべし

続けて、十六項目に亘り「馬車」を詳述する。<sup>注13</sup>

右、研堂説くところに従えば、「馬車」は西洋人によって明治になり齎された乗物、ということになる。

動物に車を引かせる構造上の類似性を有する乗物は、我国にあっては平安時代に盛んに用いられた牛車(網代車)が直に思い浮ぶ。が、牛を馬に替えて車を引かせる「馬車」の発想が普及しなかったことは不思議といえは不思議である。恐らく、馬は武者社会に帰属するとの認識が先行し、加えて馬借と称した運送業者が荷物運搬に使用したことが乗物としての「馬車」の発想を生まなかった理由のひとつに挙げられよう。

邦人が初めて「馬車」なる乗物に出会ったのは研堂の指摘に依ると、万延元年遣米使節一行が同年二月十四日ホノルル到着の際の迎えの折なる由。<sup>注14</sup>

ヘボン『和英語林集成』は再版(明5・7刊)で「馬車」を収録し、

BASHA、バシヤ、馬車、*n.* A wagon, carriage, any vehicle drawn by a horse. *Ippiki-dachi* — a one horse carriage. *Ni-niki-dachi* — a two horse carriage.

と語彙説明する。<sup>注15</sup>

欧化政策の波とその利便性とは相俟って「馬車」熱は燎原の火と燃え拡がり、明治二年五月横浜東京間乗合馬車開設営業を始めとし、<sup>注16</sup>東京市内乗合馬車路線の開業拡大を促進、機運は主要都市にも及び、更なる長距離乗合馬車が開設されるに至る。<sup>注17</sup>

その一方で、明治五年九月十二日、天皇臨席のもとに新橋横浜間の鉄道開業式、翌十三日(新暦十月十五日)営業開始の余波を受けた同区間の乗合馬車は次第に衰退。<sup>注18</sup>又、馬車道敷設による鉄路馬車の新規開業、及び人身事故や家屋毀損等の頻発により内務省警視局から府下業者へ向けて発せられた同年六月三十日付の交通規則通達<sup>注21</sup>例えば馭者は満二十歳以上にして術に巧みなること、馭者馬丁の姓名年齢等の所轄警視分署への届出義務、途次馬車に行逢う際の心得、往来雑踏の場所や交差点・橋梁・坂路等における速度制限、馭者が馬車より離れることなどの禁止等々、現行交通法規同然の厳しい通達がなされた。当然といえは当然であるが、規則を定めねばならぬという現実はその分だけ乗合馬車の普及度が高い証左といえる。今日に残る明治錦絵に各種の乗合馬車が描かれることから、<sup>注22</sup>「馬車」が文明開化の最も具体的で身近なもののひとつであったと考えられる。鉄道開業に先立つこと一年余の、明治四年八月十八日、明治天皇浜離宮御幸の折、初めて「馬車」に御すとのこと。

以下、事柄のみ年代記風に記す。

明治六年五月五日

紅葉山下女官房室より出火、諸御殿焼失、以後赤坂離

宮を仮皇居とする

同十七年九月

旧江戸城西ノ丸跡に御所造営着工

同二十一年十月

竣工、二十七日宮内省告示をもって、宮城と称す旨を公にする

同二十二年一月十一日 天皇皇后兩陛下、赤坂離宮より十五年振りに遷御

『朝日新聞』当日の社説「萬歲」の一部を引く（ルビ省略、傍点引用者）。

旭、日煌々として、燦爛たる薨に輝き、瑞氣雍々として、莊麗なる殿上に鑿びけり、豫て屢々記し奉つりし如く我々聖文武なる兩陛下にハ正に本日をして宮城に遷り給ふ大日本帝國の盛事又何物か之に如かん陛下萬歲帝室萬歲

（略）

次でに「風俗画報」第壹號注24（明治22・2・10）所収、宮城御移轉の御模様から

も引いておく（同前）。

去る十一日は兼て仰出されたる赤坂假皇居より新宮城へ御移轉の日に當れるをもて我も人も此盛典を拜觀せばやと朝未明より御順路に打集ふもの其數幾萬たるを知らず（略）宮内省の官員には午前六時より出省し皇族、大臣、親任勅任官の方々には同九時三十分假皇居へ參内せられ同九時四十分頃より近衛の騎兵、歩兵、皇宮警察官は正門の兩側へ整列し同十時 陛下には徳大寺侍從長御陪乘 皇后宮には室町典侍御同乗を勤め第二公式の鹵簿取りをもて御一例にて御出門在らせらる當日 兩陛下下の召させ給へる御料の御馬車は、先頃歐洲へ御注文ありて、御新調遊ハされたる趣にて、金光燦爛あたり目、バゆき許りなり 聖上には正裝の御軍服を召させられ（略）此日は天朗かにして陌頭の塵自ら沈まり旭日の色故ら新しく覺えて龍顏の麗はしきに照り添ひ瑞光佳氣滿城に鑿鑿たる心知せられぬやがて靜々御車を輾らせ給へバ（略）拜觀の士民は皆欣々として喜色を帶び就中府下各郡區内の公私立學校の生徒は悉く我々校名を記したる

旗を樹て奉迎し 聖駕の過ぐる處皆君が代の唱歌を謠ひ 陛下の萬歲を祝し奉りたるは實に愛でたき限りにて不覺に感泣する翁もありき（略）

四谷門半藏門櫻田門等聊妨げなく御通過遊ハされ大手の廣場に御着輩在らせらるゝや有名なる烟火師の自家鍵屋より兼て其筋の許可を得て祝田町へ仕懸け置きたる烟火數十本奉祝の爲め打揚げたり其景物は日章の國旗、菊花、虎、西洋婦人、日本力士、三羽鶴、獅子舞、蝶等にて何れも巧に見えたり（略）聖駕正門の御橋の邊に近づくや近衛の諸隊は捧銃の敬禮を行ひ樂隊は君が代の軍樂を奏せり此時無數の拜觀人は大手の廣場へ充滿て肩摩疊擊立錐の地を餘さず歡聲笑語動搖めき渡りて此千歳の盛事に遭遇せるを喜び祝さざるものなかりき既にして 兩陛下には城内へ着御在らせられ一旦御座所へ入御直ちに鳳凰閣へ出御在しまし俱奉奉迎の方々へ拜謁仰せ付られ畢て御祝酒を賜はりたりと承はりぬ

十五年の長きに亘る仮皇居からの還御、帝都民の慶賀奉祝に湧き立つ興奮振り、「大日本帝國の盛事」「陛下萬歲帝室萬歲」等に時代相を知ると同時に、御料「馬車」の新調や烟火師鍵屋による打揚げ花火の細工などに興を覺える。

「正岡子規年譜」注26は当日の動向を、

11日（金） 晴。この日は宮城移轉式を行うため、八時半運動場に整列し、十時半藏門に至り、兩陛下の万歳を祝う。（明） 明治6年来の赤坂の仮皇居を十時出輩、十一時皇居に着輩、奉迎。（古）

と、勝田主計日記・古賀ノートを資料として記す。

輩に替えて、英国へ発注、新調なった御料「馬車」による還御、単純化していえば時代風潮として欧化主義と各分野における改良流行を認めざるを得ぬ。注27

皇居新築に先立つ、十六年十一月二十九日の社交倶楽部鹿鳴館開館は世にいう鹿鳴館時代を出現させ、一部特權華族らによるその行き過ぎた欧化追隨姿勢は同二十年四月二十日、伊藤博文主催の仮装舞踏会において頂点に達した。余りの狂

態醜聞は世論の響を買い、<sup>注29</sup> 国粹論を喚起し、政府の欧化政策に反対の立場をとる評論雑誌「日本人」(同二十一年四月三日創刊、政教社発行、同じく新聞「日本」(同二十二年二月十一日発行、陸羯南社主筆、日本新聞社発行)が相次いで刊行された。

この仮装舞踏会が庶民感覚と離れた如何に恥すべきものなりしかを、研堂は「正気の沙汰とは思はれぬ紅灯緑酒の歡樂世界を幻出し」と指摘する。<sup>注30</sup>

内外貴顕紳士の交誼友情を育み結ばしむることを主旨として設立された社交俱樂部鹿鳴館、そこで催された昼夜分かたぬ歌舞宴会、慈善に名を借りたバザーや音楽会、撞球、骨牌の遊戲や賭博等々、招かれるを誉となし招かれざるを恥となす貴顕諸氏。夜会の宴果てしか迎える「馬車」、車軒に紅燈を点し、「鄰々」たる月の光を浴びながら「あとさきを争う」ようにして四方へ散り帰る。

同じ月光に大内の松が黒き影を落す。松の後方に新しき「御座所の屋根」が見え隠れる。

二十八年十月下旬、「腰骨痛」<sup>注31</sup>に一人堪えながら、思い返せば宿痾の兆候たる初略血(二十一年七月二十九日)の日のことどもふと脳裏を過ぎり、招待されたことなけれど鹿鳴館の夜毎の舞踏会や新皇居還御の様子を幻視したのが付句である。

無聊の慰め百韻、俳諧之連歌、文章と違い余り写生に拘泥する必要はない。

蹄の音を響かせて肅肅と夜道を辿る「馬車」、「あとさきを争ひて」とあるゆえ夜会開始前であれば紳士淑女を乗せたそれが陸続と車寄へ着到を競うさまであり、会果てし後の景ならば余韻陶然たる主人を乗せての「馬車」である。殊に後者の場合、「あとさきを争ひて」に想定されるのは市内乗合馬車か。中でも見映え芳しからざる瓦多線馬車と輕称され、俗に円太郎馬車と呼ばれたそれであろう。<sup>注32</sup>

権勢家の家用「馬車」と推量した円太郎「馬車」、持ち前の惡戯心か反骨心からか、馭者乗客諸共に心を合せ競争を挑み挑発する。その挑発に応じた件の御者、馬にひと鞭打ち当てて、敗けてはならじ主人の威光傷付けてはならじと許り「あとさきを争う」のである。

付句の「馬車」の解としては、開化風俗の面白味という点で円太郎馬車の方に一日の長あり。

「馬車」を軋ませ鼻息荒く瓦多線馬車が帝都の月夜を疾駆する。

前句の静を動に転じた雑句の十二句目。

注1 『蕪村全集』第一巻(講談社刊、'92・5・25、58頁。校注者尾形仿は「略」た

ならぬ体で鳥羽殿へ馬を走らせる。すわ異変の注進か。後はなお烈風募るのみ。軍記物的発想と絵画的構成」との頭注を同句に付す。一方、高橋治は『蕪村春秋』(朝日新聞社刊、'98・9・1)の季語(野分)の項で同句に言及、草田男の「保元の乱の時、鳥羽殿で兵をあげた崇徳上皇のもとへ馳せ参する光景を暗示する云々」という所説を取りあげた上で「だが、そこまで歴史に拘る必要はないだろう(略)歴史的には古代が中世に移る変革期で、鳥羽殿の一語が漠然としたその時代の不安定な感じを讀む者に伝える。蕪村の狙いはそこにあるような気がする」と述べ、「蕪村は知る由もないが」と断りを入れて「大政奉還後の」「鳥羽・伏見の戦い」の「その発端の光景と受けとって一向にさしつかえないと、私は勝手に解釈する。曲解は重々承知だが、それも俳句の面白さではないか。」(該書 106頁、107頁。傍点引用者)と、句解を示す。文中の「俳句」を「連句」と入れ替えるなら、それはそのまま稿者の依って立つ姿勢に重なる。

2 『國史大辭典』10(吉川弘文館刊、平元・9・30)、405頁、項目(鳥羽殿)(杉山信三執筆 参照)

3 岩波新古典文学大系43『保元物語・平治物語・承久記』、11頁

4 例えば、崩御当日の新院の動向を『兵範記』は次のように録す。<sup>補注1</sup>

(略) 今日御瞑目之間、新院臨幸、然而自簾外還御云々、渡御々塔之間、又不臨幸

同五日甲辰の録には、

(略) 去月朔以後、依院宣、下野守義朝并義康等、参宿陣頭守護禁中、

(略) 此外源氏平氏輩、皆悉率隨兵祇候于鳥羽殿、蓋是法皇崩後、上皇

左府同心發軍、欲奉傾國家、其儀風聞、旁被用心也、

とあり、主上新院の御仲徒ならぬことが読み取れる(以上、本文引用は『史料大成』16、該書二(昭11・5・27、113・115頁)

補注1 『愚管抄』は、

(略) ソノ時新院マイラセ給タリケレドモ、内へ入レマイラスル人ダニモナカリケレバ、ハラダチテ、鳥羽ノ南殿(ノ)、人



- モナキ所へ御幸ノ御車ヲシテヲハシマシケルニ、マサシキ法  
皇ノ御閉眼ノトキナレバ、馬車サハギアフニ(略)
- と記す(大系86、218頁)。
- 5 岩波古典文学大系86『愚管抄』、206頁
- 6 注4『兵範記』の崩後当日の録、及び同書八・九日の録(『大成』16該書、115頁、116頁、補注1)
- 八日丁未 凶會、天晴、初七日也(略)新院不臨幸(略)
- 九日戊申 夜半、上皇自鳥羽田中御所、密々御幸白川前齋院御所(略)
- 上下成奇、親疎不知云々、
- 補注1 『保元物語』は、
- (略)鳥羽田中殿ニテ御仏事被行ケルニ、新院、一所ニワタラセ給ナガラ、出サセ給ハザリケレバ、人弥怪ヲナス。剩京へ入セ可給由、内々被仰ケレバ(略)同十日(略)夜ニ入テ、新院、鳥羽ノ田中殿ヨリ白川ノ前齋院ノ御所へ御幸ナル。人コレヲ不知。只、「齋院」ノ行啓「ト披露セヨ」トテ(略)
- と物語る(新大系43収 該書上、20頁21頁)。
- 7 岩波新古典大系43収 該書上、15頁
- 8 同前書、校注者(板木孝惟・目下力・益田宗・久保田淳)による「馬車」の読みは「へうまくるま」と平仮名でなされる(該書凡例七「保元物語」2頁X頁)参照。
- 9 『史料大成』16、116頁
- 10 以下、『保元物語』が語る合戦の次第、
- 保元元年七月十一日寅刻ニ、新院ノ御所ニハ、「敵寄タリ」ト聞ケレバ、門々ヲ指堅ケルニ(略)時ヲ移ス程ニ、アナタコナタニ死物ノ数ヲ不知。寅時ニ始タル合戦、卯時ノ終ニ成マデ何コソ弱ケレ共不見。輒責落シ難クゾ見ヘケル。(略)義朝、御免ヲ蒙テ、御所ノ北ナル藤中納言家成卿ノ宿所ニ火ヲ放タリケル。西風ハゲ敷吹、猛火御所ヘソ押羅ル。御所中ノ兵共、煙ニ咽デ、目も見明ズ。義朝已下ノ兵共ハ勇責ケリ。
- 新院ノ御方ノ軍破テ、四方ハ散失。(略)軍ハ寅刻ニ始テ、辰刻ニ破ニケリ。義朝、清盛已下ノ兵、新院ノ御所焼払フ。東山ノ方ヘソ追懸進スル。謀叛ノ輩失テ、官軍尋来ニ、其行方ヲ不知(略)
- (新古典文学大系43収 該書中、44頁75頁)
- 11 『大漢和辭典』卷八、906頁
- 12 ちくま学芸文庫版該書5(97・9・10)、159頁160頁
- 13 参考のためにその項目を記す。

- (一)初めて馬車を見る (二)異人馬車 (三)乗合馬車 (四)主上の御馬車 (五)東京の乗合馬車 (六)貸馬事業の盛衰 (七)鉄路馬車営業許可建議 (八)東京鉄道馬車の始め (九)自家用馬車 (一〇)円太郎馬車 (一一)馬車繁昌の時代 (一二)馬車時代の賃金と時間 (一三)馬車の別当 (一四)二階馬車 (一五)京浜間の馬車 (一六)横浜の馬車道
- 14 注12該書、160頁 (一)初めて馬車を見る の項参照。尚、当該項目が引く『柳川日記』『岡田小記』『開智新編』未見。『柳川日記』の著者は正使新見正興の従者柳川當清か。
- 15 飛田良文・李漢燮編『ヘボン著和英語林集成初版・再版・三版対照索引』第一巻(港の人社刊、'00・1・20)、71頁
- 16 注12該書、160頁163頁 (三)乗合馬車 の項参照
- 17 同前書、163頁168頁 (五)東京の乗合馬車 の項参照
- 18 同前書、179頁183頁 (五)京浜間の馬車 の項参照
- 19 同前書、170頁172頁 (八)東京鉄道馬車の始め の項参照
- 平出鏗二郎『東京風俗志 上』(ちくま学芸文庫)に、
- 鉄道馬車は明治十三年、東京鉄道会社の起す所にして、一の乗合馬車なり。鉄軌に架したれば、動揺少く、一車概ね三十六人を限り。鉄路は芝刈留町に起り、新橋・京橋・日本橋・今川橋・万世橋を経て、下谷の通衢に至り、上野広小路を過ぎて山伏町・松葉町を経て、浅草広小路雷神門前に達す。また雷神門前より門跡前通・広徳寺門前を経て上野山下に達し、前線に会する一線あり。また日本橋線の本町より一線を派ち、人形町・横山町を経て、浅草橋に至りて岐れ、一線は蔵前通を一直線に浅草雷神門前に達して、上野線と会し、一線は蔵前通町通・小伝馬町を経て日本橋線に会するあり。又品川八ツ山を起点として、芝刈留町に達する一線あり、もと品川馬車鉄道会社の建設せるものにして、今合して東京馬車鉄道会社の営業する所なり(略)
- とある(296頁298頁、297頁に各種馬車の図を録し参考となる)。
- こうした鉄道馬車路線は路面電車、地下鉄路線へと継承発展し今に続く。
- 一例を「朝野新聞」明15・9・9付紙面から引く。
- 鐵道馬車ハ兩三日前より上野廣小路迄往復する様になりしが一昨日七日の前十時頃湯島天神町三丁目の土族齋藤幸知の長男幸太郎(四歳)が該馬車に轆き殺され目下談判中の由又昨日の前八時頃神田五軒町にて五歳計りの男子が足を敷かれたれど命に別條ハあるまじとの事又過日小傳馬町にて脛股を敷かれたる神田東福田町の板倉清次郎ハ一昨七日死去せし趣き又如何なるものゝ所爲にや一昨夜萬世橋内神田の方の橋

詰へ長三尺計りの太き鐵を打込み其の先きを曲げて鐵道の軌線へ引き  
掛け馬車の往來の出來ざるやうになし置きたるゆる數人の人足にて漸  
く抜き去りたりと多分惡車夫などの所業ならんとの事

(東京大学法學部明治雜誌文庫編「朝野新聞」縮刷版 16「へりかん社刊、昭  
57・8・2」)

「東京日日新聞」明治十年七月二日付記事。尚、同七年九月九日付で東京府知  
事大久保一翁の名により自今二階付き馬車營業停止の旨通達する。<sup>補注1</sup>

この規則は同十四年十二月十九日付、警視總監樺山資紀、東京府知事松田道之  
連名の下に翌十五年一月一日より改正施行する旨布達する。<sup>補注2</sup>

補注1 「東京日日新聞」17、明治十年七月9月(日本圖書センター刊、'95・  
2・25)、2頁

2 「報知新聞」明7・9・12付紙面

市在區々長戸長  
番外

近來二階付馬車を以營業候儀者有之候處時々往來人へ怪我致さ  
せ或ハ家屋等毀損し迷惑不少候に付右營業人へ差向二階ハ取崩  
し運轉方注意可致旨相達候因てハ今後總て道路改正相成候迄ハ  
二階有る馬車相用候儀一般見合可申此旨相達候事

明治七年九月九日 東京府知事大久保一翁

(郵便報知新聞刊行會編「復刻版郵便報知新聞」第一期第四卷  
「柏書房刊、'89・3・20」、137頁)

3 「東京日日新聞」明14・12・21付紙面、警視廳公布より、  
甲第五十五號

馬車取締規則左之通改正來ル明治十五年一月一日ヨリ施行候條  
此旨布達候事

但從前營業者ハ右規則ニ照準シ鑑札受取方願出ヘシ

明治十四年十二月十九日

警視總監 樺山資紀  
東京府知事松田道之

馬車取締規則

第一條 乗合馬車貨馬車荷馬車ノ營業ヲ爲サントスル者及ヒ乗  
合馬車ノ馭者馬丁タルヘキ者ハ第一第二號書式ニ準シ區ハ區長  
郡ハ戸長ノ奥印ヲ受ケ警視廳ヘ願出鑑札ヲ受クヘシ但廢業ノ節  
ハ鑑札ヲ所轄警察署ヘ返納スヘシ○第二條 馭者ハ滿二十歳以  
上タルヘシ但技術ノ巧拙ヲ檢査シ許否スルモノトス○第三條  
轉居改姓名及ヒ鑑札ヲ遺失若クハ毀損シタルモノハ第三號書式  
ニ準シ第一條ノ手續ヲ以テ更ニ鑑札ヲ受クヘシ尤轉居改姓名ヲ

除クノ外區戸長ノ奥印ヲ要セス○第四條 馭車馬丁ハ鑑札ヲ願

帶シ何人ニ限ラス要用ノ場合ニ於テ見シテ求ムル并ハ之ヲ示

スヘシ○第五條 鑑札ヲ貸借シ及ヒ檢印ヲ轉用ス可カラス○第

六條 乗合馬車ハ其所有主ノ住所姓名及ヒ乗客ノ定員ヲ記シタ

ル木札(長七寸巾五寸)ヲ車体後面見易キ所ニ釘付スヘシ○第

七條 乗合馬車ノ構造及ヒ乗客定員ハ左ノ各項ニ從フヘシ

一四輪ニシテ運轉自在且堅牢ナルモノ但屋上ニ客座ヲ具フルヲ

得ス

二腰掛臺巾一尺一寸以上ヲ以テ一人ノ度トス

三乗合馬車ハ馬一匹ニ付乗合六人ヲ以テ限リトス

四乗客十歳未満ノ者ハ二人ヲ以テ一人ト看做シ保護人アル三歳

未満ノモノハ定員外トス(以下略)

乗合馬車を現在の諸公共乗物に置き替へるならば現行の運轉免許取得規  
則や道路交通法等々の原形そのものといつてよい。

注12該書、163頁(四) 主上の御馬車 の項参照

「朝日新聞」復刻版、明治編3(日本圖書センター刊、'92・5・25)、25頁

復刻版(圖書刊行會刊、昭48・5・25) 23・24頁

「朝日新聞」明22・1・12付には、

(略) 同十時三十五分新宮城へ着渡あらせらる此時二重橋前に於て篠原

彌平氏の烟火十數本を打揚げて祝意を表せるあり(略)

とある(注23該書、29頁)。

和田克司編『子規の一生』(増進會出版社『子規選集』14(1933・9・20)収、153頁  
尚、参考までに子規の「新宮へ御移轉あらせ給ふを祝き奉る文」を引いておく

『全集』第九卷収「手つくりの菜」<sup>補注1</sup>、323・324頁。

明治廿年あまり二年の一月十一日にあらたに造らせられし大宮へ御わ  
たましあらせらるへき詔ありしかは、わ人等も打つて御路すしに迎  
へ奉る。この日ハ久方の空も晴れわたりて大御光を隠すへき雲もなく、  
御堀の松ハ大君が八千代の色をこめ、むれつとふ見ハ浪靜かにして浮  
寐の夢いと安かりなん。かゝる折しも綾にかしこき我天皇ハ錦の御車  
をしつかに引かせて新宮へ移らせ給ふ 親王を始め多くの大臣つかさ  
人等ハ皆御後に供し奉りたる、実にいかめしくも亦うるハしき齒<sup>ミナ</sup>薄<sup>ハ</sup>  
になん、かゝる有様をまのあたり見まいらせて、いくとせの間大宮を  
つくらせ給はず假の御宮におハしませしこと。仁徳天皇の御心になら  
ハせ給ひけん、されば此大宮ハ民の寵を望み給ひし高き屋にも比べつ  
べし。松の千代田に大宮を作らせ給ふへき詔ありしより、人ミな争ひ

て打つとひ建てまゐらせしハ文王の臺をためしに引くも、おろかならん、千尋栲縄もて百八十結びにむすび、宮柱太しきたてたる様ハ見るべくあらず。御棟の千木高しりたるは高くいちじく、前に渡せるハ浮橋高橋にやと思はる、大御位ハ千代に八千代にさゝれ石の巖となりてゆるきなく、九重の八雲、ハ外国までかゝやぎわたり、科戸の風にハ遠き處の夷等沾皆なびかんことを祝き奉りて、  
いつまでもつきせぬ御代にくらへてハ  
千代のミとりの松もののかハ

一部一年三組  
正岡常規

27

補注1 同文集については同巻の渡部勝巳の解題参照(827頁)  
補注2 具体的な、個々の改良運動は授置き、読売壮士団体青年倶楽部の創立者久田鬼石作「改良節」の流行を挙げてよいであろう。

補注1 「團圓珍聞」第六百卅一號、(明21・1・14)の〈珍報〉欄は當世流行改良競と題し、衣服改良以下塵溜改良まで三十二種の改良を挙げる

10287 10288  
〔團圓珍聞〕第四〇一號第七五四号へ本邦書籍株式會社刊、'82・6・30

2 詳しい詞章は添田啞蟬坊『流行歌・明治大正史』(刀水書房刊、昭57・

9・30)、70・71頁。添田知道『演歌の明治大正史』(岩波新書501、'63・

10・21)、14・15頁等参照

28

『明治事物起原』8(ちくま学芸文庫版、'97・12・10)、217・219頁、『國史大辭典』

14、811頁当該項目(稲垣榮三執筆)参照

同右『大辭典』5、661・662頁項目〈國粹主義〉(鹿野政直執筆)参照

29

『明治事物起原』8、219頁  
和田克司は『子規の一生』(『子規選集』14)の解説「子規の年譜」中で、古賀蔵

30

人に言及し、彼の人となり及び業績を紹介した上で、

31

(略)とりわけ、従来の定説を動かさせたのは、明治二十一年の夏、子規の咯血についてであろうか。諸資料から八月一日頃、佐々田八次郎と鎌倉を訪ねたとき、雨中に二度三度の少量ながら血を見たのである。古賀蔵人は、東京発の船便の探索から始まり、天候、潮汐の干満、大流星の記録から判断して、咯血の月日を七月二十九日と推定した。本書で紹介し得た地味な考証である。断片的な資料をも生かし子規と結びつけていった努力は、並大抵のものでない(略)本書の年譜を作成するにあたり、及ぶ限り古賀蔵人の調査と考証を重んじ、各項目にその名を留めるようにした。

32

との高い評価を述べる(該書、706頁)  
暉峻康隆『落語の年輪』(講談社刊、昭53・3・25)から引く(211・212頁)。

ラッパの円太郎は円朝門で、円好から四代目橋家円太郎となった。陽気な音曲師で、真鍮のラッパを持って高座に上がり、都々逸の合間にブービーとラッパを吹き鳴らし、馬車の気取りで「お婆さんあぶないよ」とくすぐったり、「納豆々々」「豆腐イ生揚げ」などと売り声をやる。かけ持ちで次の寄席へ行くときは、下座を勤める女房と人力車に相乗りし、その途中人ごみにさしかかると、ラッパを吹いて「お婆さんあぶないよ」などとなるので、「ソレ円太郎だ」と往来の人が道をあけたという。それが評判になって、ガタ馬車を円太郎というようになったのだから、大した人気である。咄はからつ下手であったが、何ともいえないおかしみがあつたので、円遊について人気があつた。明治三十一年十一月四日に五十四歳でなくなっている(略)

〔傍点引用者〕

(おおしま とみお 日本語日本文学科)